

子どもが親の仕事を参観する意義

ー労働人口問題への解決策としてー

三重大学 石田尚子

1 目的

現在日本では、労働者不足解消を目的として、女性などの潜在的労働者の就業環境を整えるための施策が進められている（内閣府共同参画局 2017）。こうした動きに対し本研究は、労働環境の整備とは一線を画し、離職率や非就職活動人口の増加に注目し（城 2006）、労働者側の労働意欲を検証した上で労働意欲を育む施策について検討する。更に、子どものうちに労働意欲を育むことがより重要であるという観点から、子どもに対する経済教育のモデルの一つとして、子どもが両親の働く姿を見学する「子ども参観プログラム」の実施し、その結果を報告する。

2 方法

本研究は、2つのアンケート調査と1つのケーススタディを実施した。アンケート調査1では成人男女250名を対象とし、アンケート調査2では小学校4, 5, 6年生計290名を対象として、それぞれ成人男女と子どもの労働に対する意識を検証した。更に、子どもの労働意欲を育むための「子ども参観プログラム」を実施し、参加した子ども3名に対してもアンケート調査を行った。

3 結果

調査1では、成人男女共に、「なんとなく」または主に経済的な事情を理由として労働に従事しており、労働自体に対する積極的な意欲は乏しいことが確認された。調査2では、親の働く姿を見たい（が見る機会がない）と思っている子どもが多数おり、更に、親の働く姿を見たいまたは既に見ている子どもたちが特に労働に対して意欲を持っていることが明らかとなった。逆に、親の働く姿を見たくないもしくは見たいかどうか分からないと思っている子ども達からは労働に対する不安や無関心が読み取れた。

調査2の結果は、子ども達の親の働く姿を見るという経験には、子ども達の労働意欲を育む効果があるということを示唆している。筆者は、「子ども参観プログラム」として子どもに親の働く姿を見学する機会を与え、見学前、見学後の子どもの労働意欲についてアンケート調査を行なった。結果、親の働く姿を見学した後の子どもからは、労働に対する興味や意欲の向上が認められた。

4 結論

本研究は、成人男女に対するアンケート調査によって労働者の労働意欲の低さを指摘し、また子どもを対象としたアンケート調査によって親の働く姿を見ることによって労働意欲が刺激されることが示唆されたことから「子ども参観プログラム」を実施し、その効果を確認した。労働意欲の豊かな子どもの数を増やすことは、労働意欲のなさを原因とした離職率または非就職活動人口を減らし、長期的には労働力不足の解消につながると考えられる。従って、本研究は、労働人口の拡大を、労働環境面の整備などとは別の切り口から、具体的には労働者側の労働意識を高めることによって進めるための施策を提案したものであると言える。

文献

城繁幸, 2006, 『若者はなぜ3年で辞めるのか? 年功序列が奪う日本の未来』 光文社.

内閣府男女共同参画局, 2017, 『男女共同参画白書 平成29年度版』

(http://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/h29/zentai/html/honpen/b1_s00_01.html
2018年4月2日取得).